

たことでもある。前述の文行忠信の、文は博文であり、行は約礼である。

博文約礼の語は論語の中で所々に見られる。顔回の述懐として「夫子は我を博するに文を以てし、我を約するに礼を以てす」とあり、又伯魚への戒めとして「詩を学ばざれば以て言ふことなし。礼を学ばざれば以て立つことなし」と言っているが、前者は博文をすすめたるものであり、後者は約礼を教えたものである。顔回が仁を問うたのに対して、「克己復礼を仁と爲す」と答えているが、復礼は即ち約礼であり、又約礼の一端として「非礼視る勿れ、非礼聴く勿れ、非礼言ふ勿れ、非礼動く勿れ」とも言っている。

忠信は誠意誠心と解すべきか、博文約礼で修養を重ねても、それが名利を求むるものや、世間体をつくろふ等のものでは駄目で、誠意誠心から出るものでなければならぬといふ戒めたるものである。

高標公が四教堂と命名した意味も、此の博文約礼忠信を教養の理想として、藩の子弟の教育に当ることにあつたと思われる。

四教堂は安永六年（一七七七）八代高標公の開設から、明治四年（一八七二）十三代高範公の時に開校する迄、百余年間佐伯藩教養の中心として、藩の子弟を教育し、幾多の人材を育成した。しかし開校以来又百余年、今や四教堂を偲ぶものは殆んど湮滅して、其の名も郷人に忘れ去られようとしている。ただ一つ、当時四教堂に掲げられていた、高標公の題字の入った、狩野甲信筆の司馬温公水缸をこわす画の扁額が、佐伯小学にうけつがれて校長室に掲げられているのは、うれしいことである。

四教堂の概つて立つた、博文約礼忠信の教育方法教育理念は、今日の教育から考えても、いささかも遜色のな

いものと思われる。

私達は四教堂の名と共に、その教育の由つて来たる所を伝えて、郷土教育の進展充実に、人材の育成に資した

随想

年頭に思うこと

会員 伊賀重雄

私に去る大晦日、叙白歌合戦がすんでから、除夜の鐘を叩きに西運寺に参拝しました。小高い参道から見ると生野中心地の夜景の美しさ、今まで見なれたわが住む里の異なる美しさを発見した感じでありました。

西運寺の鐘楼に辿りつけば、数人の青年達が感嘆よく鐘を叩いていました。鐘の音は近くから遠くは、遠くように伝ひまき伝わり、夜景の美にとけこんで、静寂の中の人々の煩惱を功德する力をもっているようです。

逝く年、来る年、本当にあわただしく流転します。この中であつて、私達はあわただしい世の中から、一度自分を見つめて見たい。逃避するのでなく生活の中での自己再発見であります。

郷土史研究もそうした意味での生活の一部であると思ひます。佐伯史談が百号という目標を達成し、これからはその集大成と、地域にある未発見の資料の発掘調査が全会員に課せられた使命でもあります。後世に確実な史料を、より多く届けることが私達グループの仕事であると思ひます。これからの研究も一人一人の研究でなく、

対象物に對しては、三人づつグループを形成して、主觀的にならず、適確な客觀性を持續する方法にしては如何かと思ひます。

次に、佐伯市が市制施行三十年の記念事業として、佐伯市誌の編纂を志して実行してゐるが、委員の大半はわが佐伯史談会の会員であります。会の年末集會の時に私は次の様に發言し友が、ここに再び發言します。佐伯市がその行政区域だけを中心にした市誌をつくること、こゝとは當然なことではあるが、私が希望すること、南部佐伯市は広域市町村圏に指定され、周辺町村は行政区域の中での一つになることを目指してゐます。佐伯氏、毛利氏の治めて居たころの佐伯は還りつつあります。そうした意味で各町村に呼びかけ、市制三十年と區別個々意味での市誌編纂をしてほしいと思ひます。佐藤蔵太郎先生の『佐伯志』、増村博士の『佐伯郷土史』等の著述もあるが、グループによる史料編纂は、これが始めてであります。委員の皆さんが折角努力しても、本當の市誌として且郡部を含んでこそ価値があるのでないかと考へます。さまざまな市の市誌では委員の方々が可愛想です。この意味で佐伯市の市長さん始め、市役所の関係者の方々に、御一考をしいただきたいと思ひます。幸いまだ印刷してゐないし、関係町村に市から呼びかけ、価値のある史誌をつくつて貰いたいと思ひます。これは私の希望であつて、自分の菲才を省すに揚言したこと、若し御理解いただけたら幸甚に存じます。

一月九日、野津探究會と佐伯史談會の合同研修會が佐伯市に於いて開かれることになつてゐるが、現地研修の後の研究會では、お互の史料の交接が出来る研究會でありたいものと考へます。元來他の會との接触は儀禮的になりがちであるが、これを機会にさう云う方向にもつ

ていつて貰いたいと思ひます。

弥生町は四十六年度、年末の文化財調査委員会で、所の文化財施策に對し次のように話し合つたが、これについて皆様に伝えたい。文化財に對する保護、保存は、従来通りきめ細かくして遺憾のないようにしたい。特に町が計画して居る中央公民館の建設に伴ない、この中に文化財收蔵室を造つてもらい、文化財並に民俗資料の收容を町に働きかけるといふことが方針として打ち出され、本年か、これを強く推進したいと思ひます。

新春二日の史談會の初歩きには是非参加して、佐伯城址を中心にした探求に半日を費したいと思ひます。城山の上から見る佐伯市の市街は佐伯湾、白濁八幡の静寂さと、胸一ぱい味あいたいものです。

思つたことを後先なく走り書き、皆様に御見せするのだから、失礼なこととは存じますが御容謝願ひ度い。今年もよろしく御指導御啓示のほどを、本年ながらお願い致します。(S47.1.1年前3時)

研究

毛利歴代の名前について

會員 佐 脇 貫 一

佐伯藩主毛利氏代々の本名(諱)については諱及方が難しくわからぬという人が多いが、増村隆也先生の佐伯郷土史には次のように讀んでゐる。

- 初代 高政(たかまさ)
- 二代 高成(たかなり)
- 三代 高尙(たかたか)
- 四代 高重(たかしが)